

# 東亜同文書院記念基金会ニュース

第19号

2017年4月～2018年3月



## Contents



第24回 東亜同文書院記念基金会授賞式 -02

東亜同文書院記念基金特別奨励賞・功勞賞授与 -10

参列者、アーカイブズを語る-11

本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方齋先生墓参 -30

東亜同文書院大学記念センター活動レポート -33

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

# 第24回東亜同文書院記念基金会授賞式

第24回東亜同文書院記念基金会授賞式が2018年3月28日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第24回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第24回となる今回は、記念賞として山田正氏が選ばれました。

## 〔記念賞受賞者〕

山田 正 氏

一般財団法人霞山会の理事（2006年7月1日～2015年6月26日）、筆頭常任理事（2007年1月～12月）、理事長（2008年1月～2014年6月30日）をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008年4月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。

霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交流、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。

## 〔授賞式挨拶〕

川井 伸一 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学長）

皆様、おはようございます。東亜同文書院記念基金会会長を務めています。愛知大学の川井でございます。本日は東亜同文書院基金会功労賞を受賞されました山田正様に、まずは心からお祝いを申し上げます。

山田様は霞山会の常任理事、さらには理事長を長年の間お務めになり、霞山会のさまざまな活動、特に中国をはじめとするアジア諸



国との文化教育交流、学術交流活動等に多大なご貢献をなされました。一例を挙げれば、霞山会様は2006年から3年間ほど上海交通大学の校史研究室との共同研究をされました。これは、戦前の東亜同文会、東亜同文書院、上海交通大学との歴史的な関係を明らかにするという研究プロジェクトでございます。後日のことになりましたが、私は共同研究の論文集を読む機会がありました。上海交通大学側の研究者、特に若手研究者の論文において、戦前の東亜同文書院と近隣の上海交通大学との学生間の交流があったということ、さらには東亜同文書院から上海交通大学の方にいるいろいろな面で影響を与えたことなどの記述があり、大変興味深く感じたことがございます。このような共同研究について、山田様は霞山会の理事としてそして理事長として多大な貢献をされたと評価しております。

それからもう一つ、愛知大学との関係におきましては、山田様は2008年から2014年5月までの6年間、学校法人愛知大学の理事をお務めになりました。ちょうどこの時期は、愛知大学が名古屋校舎建設計画を進めている時でございました。2012年4月には新校舎の一部が完成し、利用開始いたしました。その前の2008年から2009年の時期には、いわゆるリーマンショック等の影響を受けて大学の財政が大きな影響を受けました。そのなかで新校舎の建設を如何に

進めるかをめぐって大きな議論になったのです。結果として、新校舎の建設計画を一部変更するということになりました。ちょうどその時期に、山田様は愛知大学の理事として、それまでの社会的なご経験とご見識を踏まえて、ご意見やアドバイスをされるなど、愛知大学の経営面でも貢献なされました。この度は、東亜同文書院記念基金会の記念賞を受賞されたことに対しまして改めてお祝いを申し上げます、私の挨拶に代えさせていただきます。

### 〔記念賞推薦の辞〕

池田 維 氏(霞山会理事長)

皆様、おはようございます。ご紹介いただきました霞山会理事長の池田と申します。本日は東亜同文書院記念基金会の功労賞を山田正様を受賞されました。心からお祝いを申し上げます。今、川井学長からご紹介したいと思います。今、川井学長からご紹介がございましたが、山田正様は霞山会の理事長としても長くご勤務になりました、それから愛知大学の理事も務めておられました。

霞山会と東亜同文書院というのは歴史的に見ると極めて緊密で特別な関係がありました。そして、山田様が、中国、台湾、アジア諸国全般との文化交流、学術交流、そして

調査研究事業等について積極的にご尽力されたということは我々もよく伺っております。そのようなことから、本日、基金会の功労賞を受賞されたということは、素晴らしいことです。

霞山会の『東亜』という月刊誌がございます。これは中国、台湾をはじめとしてアジア諸国一般についての政治、経済面の専門誌であり、多くの方に愛読されているという事で我々としては喜んでおります。これとならばまして霞山会で『Think Asia』アジアを考えるという季刊誌。これは無償で配布しておりますが、『Think Asia』が始まったのがちょうど山田さんの理事長の時期でありまして、この中で特に霞山会のPRも兼ねるということもあって、近衛篤磨という東亜同文会の初代会長であります近衛氏を中心にして、近衛氏の周辺、あるいは関係者と明治のアジア主義というものについて多くの論文が書かれました。それをきっかけに、いく



つかの場所でシンポジウムを行ってまいりました。一つは京都の立命館大学、もう一つが大分の立命館アジア太平洋大学。来月、青森県の弘前でシンポジウムを行います。この三つのテーマに共通しているのは明治アジア主義というもので、明治時代に日本がアジア、あるいは中国と色々関わったこと。そのことはどういう意味を持っていたのか、色々な角度から専門家の方々に議論をいただくということでもあります。

なぜ弘前が選ばれたのかというと、近衛篤磨も東亜同文書会の初代の会長ですが、その時の幹事長が陸羯南という人物で、陸自身は弘前の出身ということもあります。いずれにせよ、日本全土の中で、日本とアジア周辺諸国との関係がどのように変わっていったのか。どのように変わっていないのか。今の時点で色々振り返って考えてみるこの意味がある。そのようなシンポジウムを行ってまいりました。

最近ノーベル文学賞をもらったカズオ・イシグロ。イギリス人ですよ。この人のおじいさんが、実は東亜同文書院の第5期生であります。この間、霞山会の資料を見ておりましたら、当時、学生たちが中国の地域を回って旅行記を残すということをやっておりました。熱河という言葉としては残っていませんが、地域としてはもう変わってしまった行政単位です。いずれにしても熱河地域を、石黒昌明氏が数人の学生仲間と一緒に回った

記録というものが出ています。個人的な関心事項ですけれども、石黒一雄という人の文学は記憶を辿りながら自分自身を確かめていくというところがある。おじいさんが残した記録があることを知れば非常に関心を持つのではないかな、彼にコピーでも渡してやれたらなど、思っているところでもあります。

いずれにしても山田さんにおかれましてはそういった意味で霞山会、東亜同文書院、愛知大学との関係を色々経験されたということだと思います。皆様方のご同意を得て今日授賞式が行われたということから心からお祝いを申し上げます。どうもおめでとうございました。

## 〔受賞挨拶〕

山田 正 氏

ただ今、受賞の栄に浴すことができました山田正でございます。本日はこのような社会的に広い観点から見ましても非常に価値のある受賞であり、それにかかる表彰であると存じまして誠にありがたく、感謝感激で胸がいっぱいになっていくところでございます。

愛知大学、霞山会という一心同体、歴史的にはそのような間柄でございますが、両方の歴史的、あるいは今日における日常的な活躍の価値も強く受けている次第でございます。これから色々日中関係も含め、我が国の国際

情勢も戦争の危険というものが非常に少なくなっているように感じられます。大昔と比べますと世界を見る目に緊迫感がちよつと薄い。私も、もう83年も生きていますから、大東亜戦争の時も分かっているわけです。そういう時代と比べると非常に平穏だと思えます。しかし、それに同調しつばなしということではなく、同根の組織である愛知大学と霞山会というのが一体となって本日の世界情勢、我が国の情勢についても高い見識を持って研究、影響を与え、ますます活動を活発にしていきたいと思えます。

本日がこの表彰の栄を浴せたのも組織力の賜物でございます。そういう組織において仕事をし得たことを改めて非常にありがたく幸運なことだと思つて、感謝の念を深くしている次第でございます。ありがとうございました。



## 東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	<p>平成5(1993)年11月5日</p> <p>上海交通大学 中日科技研究会 (翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長)</p> <p>科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)</p>
記念賞	<p>谷 光隆氏 (元愛知大学教授)</p> <p>大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。</p>
記念賞	<p>菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期)</p> <p>中国人留学生を支援。</p>
第2回 平6(1994)年度 記念賞	<p>平成6(1994)年9月16日</p> <p>林文月氏 (台湾大学名誉教授)</p> <p>源氏物語他を中国語に翻訳刊行。</p>
記念賞	<p>栗田尚弥氏 (埼玉大学講師)</p> <p>「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。</p>
記念賞	<p>白川正雄氏 (42期)</p> <p>戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。</p>
記念賞	<p>村上和夫氏 (長野県中国文化研究会副会長)</p> <p>中国古代瓦当文様の研究を刊行。</p>
第3回 平7(1995)年度 記念賞	<p>平成7(1995)年9月13日</p> <p>藤田佳久氏 (愛知大学教授)</p> <p>大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を 刊行。</p>
第4回 平8(1996)年度 記念賞	<p>平成8(1996)年9月6日</p> <p>ダグラス・レイノルズ氏 (ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時))</p> <p>東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。</p>
記念賞	<p>陳 弘氏 (44期)</p> <p>日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。</p>
第5回 平9(1997)年度 記念賞	<p>平成9(1997)年10月7日</p> <p>遠山正瑛氏 (鳥取大学名誉教授)</p> <p>日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。</p>
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	<p>平成10(1998)年9月24日</p> <p>薄井由氏 (上海復旦大学修士課程)</p> <p>「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。</p>
研究奨励賞	<p>水谷尚子氏 (日本女子大博士課程)</p> <p>書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。</p>

第7回 平11(1999)年度 記念賞	平成11(1999)年9月28日 翟新(テキシン)氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的研究として高く評価された。
第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)年9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏(元北京大学文教專家) 「北京大学 超エリートたちの日本論—衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外における高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果たし、日中友好と国際親善のために尽力した。

第 15 回 平 20(2008)年度 記念賞	平成 21(2009)年 1 月 30 日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。
第 16 回 平 21(2009)年度 記念賞	平成 22(2010)年 1 月 27 日 葉敦平氏（上海交通大学校史研究室教授） 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。
第 17 回 平 22(2010)年度 記念賞	平成 23 年(2011)年 1 月 26 日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。
記念賞	愛知大学中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。
第 18 回 平 23(2011)年度 功労賞	平成 24 年(2012)年 1 月 24 日 藤田佳久氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長） オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。
奨励賞	武井義和氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。
第 19 回 平 24(2012)年度 奨励賞	平成 25 年(2013)年 1 月 25 日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。
奨励賞	有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを 2008 年以來ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。
第 20 回 平 25(2013)年度 記念賞	平成 26 年(2014)年 1 月 28 日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001 年には日中友好 21 世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。

<p>功労賞</p>	<p>平井誠二氏（公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長）</p> <p>東亜同文書院卒3期生大倉（旧姓江原）邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。</p>
<p>第21回 平26(2014)年度 記念賞</p>	<p>平成27年(2015)年1月27日</p> <p>北川文章氏（霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長）</p> <p>日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。</p>
<p>功労賞</p>	<p>仁木賢司氏（ミシガン大学上級ライブラリアン）</p> <p>東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のグローバル化」、2014年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。</p>
<p>第22回 平27(2015)年度 記念賞</p>	<p>平成28年(2016)年1月22日</p> <p>小崎昌業氏（東亜同文書院大学第42期、愛知大学第1期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使）</p> <p>東亜同文書院大学の第42期生並びに愛知大学（旧制）の第1期生として、歴史的に関わりが深いこれら2つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。</p> <p>また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。</p>
<p>第23回 平28(2016)年度 功労賞</p>	<p>平成29年(2017)年2月1日</p> <p>村上武氏（回光会・東光書院院長）</p> <p>東亜同文書院18期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤麿、根津一の三先覚（聖人）を祀った靖亜神社のご神体を帰国後ご自宅（埼玉県）に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。</p> <p>あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。</p>



第24回 平 29(2017) 年度  
記念賞

平成 30 年 (2018) 年 3 月 28 日

山田正氏 (霞山会元理事長、愛知大学元理事)

一般財団法人霞山会の理事 (2006～2015 年)、筆頭常任理事 (2007 年)、理事長 (2008～2014 年) をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008 年 4 月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。

霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。



表紙写真ご芳名

敬称略

中島寛司

倉持由美子

高井和伸 大滝則忠 星博人

荒尾初雄 淀野敏男 藤田佳久

阿部純一

村尾竹一 金森定夫 池田維

石田卓生 伊藤登美夫

中川善弘 山田正

中山弘 岡村幹吉

加藤大策 川井伸一

栗田尚弥 小川悟

田辺勝巳

近藤智彦 仁木賢治 小崎昌業

武井義和

釜井卓三 三好章

堀田幸裕

阿部光 田沼敏子

# 東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

## 【2017年度受賞者】

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

国際コミュニケーション学部

わたなべ まみ  
渡邊 茉珠

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

ふたむら ゆうき  
二村 勇輝

もみやま まお  
椴山 真央

文学部



## 【基金会役員名簿】

会長

川井 伸一  
(愛知大学理事長・学長)

副会長

池田 維  
(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久  
(愛知大学名誉教授)

星 博人  
(霞山会常任理事)

三好 章

(愛知大学東亜同文書院大学  
記念センター長)

近藤 智彦

(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉  
(岡村会計事務所)

## 参列者、

## アーカイブズを語る

授賞式の後、交流会が催され、書院・愛知大学卒業生や関係者の方からお言葉をいただきました。

**田辺** 愛知大学東亜同文書院大学記念センターの紹介をさせていただきます。2週間前に上海交通大学にて研究交流を行ってまいりました。その時の写真を皆さんに披露させていただきます。まずは、センター長の三好先生から記念センターのメンバーを簡単に紹介させていただきます。

**三好** 本日は基金会の授賞式おめでとうございます。そして、記念賞を授賞なされた山田様、おめでとうございます。

ご承知のように、豊橋にございます愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、愛知大学の大きな前身である東亜同文書院及び東亜同文書院大学、そして現在の愛知大学に関する様々な歴史資料や記録を収集し整理、公開展示しております。本センターは1993年5月、本学文学部で地理学を講じておりました藤田佳久教授の尽力により、発足いたしました。藤田教授なくして東亜同文書院大学記念センターはないと言っても過言ではご

ざいませぬ。本センターはこれまでに日本全国各地で、さらにはシカゴなど海外でも展示会、講演会を開催し、多くの方々に東亜同文書院と愛知大学について知っていただく機会を提供して参りました。昨年2017年は、これを浜松市で行い、熱心にご覧頂くことが出来ました。今年2018年は愛知大学とつての地元である愛知県岡崎市で開催する予定であります。

こうした公開事業と同時に、本センターの重要な業務として、東亜同文書院とその周辺に関する研究とその成果の公刊がございます。多くの研究機関では「紀要」と呼ばれる場合が多いのでありますが、本センターでは毎年、『同文書院記念報』を出版しております。ぜひお手に取ってご覧ください。また、センターに所属する愛知大学教員が中心になつて行った研究プロジェクトが多々ございますが、その成果の一つに、この3月に刊行した『アジアを見る眼―東亜同文書院の中国研究』がございます。これは、東亜同文書院が

後世に最も寄与したものと云つて差し支えないと思ひますが、書院45年間の中国研究成果とその方法論の持つ現代的意義について、内外の研究者が集まつて行われたシンポジウムでの報告に手を入れたものです。この中で、仁木賢司先生はアメリカの東亜同文書院研究の実態について、史料の側面から述べられ、ジョージア州立大学のダグラス・レイノルズ先生が同文書院の研究の優越的な側

面をボトムアップで行われた研究であること、フィールドワークの重要性を実践的に証明したことなどを研究の先駆性として明らかにされました。また、書院初期の教授である根岸侘の中国社会論と、学生指導を近代史の中で考察した論考もございます。

記念センターでは、先ほど申しましたように同文書院に関わった人々の事跡に関する研究も行っております。その一部をご覧いただけるように展示してございます。例えば、本日テーブルの右側に置いてあります『方鏡山浄圓寺藤井静宣写真集』がそれです。現在豊橋の郊外にある浄圓寺の先々代のご住職が、東亜同文書院第24期の聴講生なのです。そして、書院での教育と生活に大きな影響を受けて、戦時中から戦後にかけて日中間の仏教交流をしてきた方で、その方の写真集です。藤井静宣は、同文書院で身につけた中国語を



活かしまして、中国の仏教関係者と交わり、現在ではほとんどが稀覯本となつてゐる中国の仏教関連の雑誌を収集しました。中国仏教界に関しては、中国仏教協会の中心人物であつた趙樸初ちやうぼくしよとも個人的なつながりを持っていたという方です。趙樸初は、中国が人民共和国になつて、共産党を相手にいかに仏教を中国に残すかで苦勞なされた方です。そういった方との交流の記録などの実績に関わる史料が、研究者の目にほとんど触れることなく、淨圓寺というお寺の庫裏に山ほどあつたのですが、そのデータを整理し、目録を作りました。これは、今後の日中仏教交流と、日中近代史研究にとつて意義ある仕事であると自負しております。

さらに、これらは、文科省の競争的資金、戦略的研究基盤形成支援事業の一環として昨年刊行した、『近代日中関係史の中のアジア主義』、『書院生、アジアを行く』です。

本センター運営委員のひとりである本学加納寛教授編の『書院生、アジアを行く』は、書院生の大旅行がどのように展開されていったのかについて、単純にその足跡を追いかけるだけではなく、それが21世紀の現在どのような意味を持つのか、直接的に投資などの参考になるというだけではなく、それぞれの地域の現在に至るプロセスを理解しなければ、本質的な対応が困難な場合が多くあります。そうした時に、100年前の彼ら書院生が一体どういう困難にあつたのか、それ

をいかに克服したのか、ということが書かれております。それから前センター長である本学名誉教授馬場毅編『近代日中関係史の中のアジア主義』は、書院の設立団体である東亜同文会にとつて、切つても切れない思想的バックボーンであります。アジア主義について、そのアモルファスさをいかに整理するか、単に帝国主義的侵略思想とだけ出入りすることの困難な戦前のアジア主義について、それを再評価するにはどのようなしたらいいのかに関する試論が何本もの論考として提示されています。

このように同文書院関係の研究は、単行本のかたちで世に問うことができるようになりました。また、毎年のございですが、最近のものにしましては『同文書院記念報』の研究論文、そしてセンターの活動等を記したものをご覧いただければ幸いです。

ところで、本センターは海外にも多くの協力者を持っております。一例を挙げますと、中国内モンゴル自治区のフフホトにある内蒙古大学に、愛大OBが専任教員として研究活動をいたしております。内蒙古大学には日本留学の経験を持つ教員が数人おります。フフホトは、昔は「綏遠」「帰綏」という二つの町からできておりました。同文書院の大旅行にとつても、常に重要な場所になっております。張家口からモンゴルに入ったとき、最初に訪れる大都市が現在のフフホトでした。これは、書院生大旅行の再踏査を考えた場合でも、や

はり要地として避けて通ることは出来ません。その意味でも、内蒙古大学に有能な協力者がいると言うことは、今後の研究にとつて心強いことです。さらに、書院生は東南アジアにも足を伸ばしております。本センターの今後の研究計画にしまして、視野を拡大させ、どのような研究、どのような調査が行われていたのかをあきらかにするところまで進めているところがございます。すぐに答えは出ないかもしれませんが、地道な研究と的確な紹介を重ねていきたいと思っております。今後ともご支援よろしくお願い致します。

最後になりましたが、本センターの重要なスタッフの一部を紹介いたしたいと思致します。まずはご存じの藤田佳久名誉教授です。すでにご退職なさつておられますが、センターの研究活動や運営では非常に大きなアドバース、ご意見を頂戴しております。

藤田 簡単にお話をさせていただきます。今、皆様方とのこの会合はもうずっと長く続けてまいりました。皆様も結構楽しみにしておられることと思います。私も2回ほど表彰されたことがございますけども、多くの関係者の方々が東亜同文書院、東亜同文会、霞山会、愛知大学の関係で色々な研究、色々な催しとかテレビ番組制作などで活躍され表彰されてまいりました。非常にいい趣旨の催しだと思っておりますし、発展してきています。

思います。東亜同文書院の卒業生の方々は毎年少しずつ減っており、少し残念ですが、それはそれで東亜同文書院の名前はこれからもずっと残っていきます。

ところで、この本が、年末に出版された『日本人学徒たちの上海』です。副題が「上海日本中学校生と東亜同文書院生」というタイトルです。実を言うと上海日本人中学校卒業生の同窓会の人たちと縁がありまして、その縁が元で、上海日本人中学校の同窓会が今度解散することになったことから同窓会の基金の内、100万円を東亜同文書院大学記念センターの出版物の刊行助成金にしてほしいという申し出がありました。上海日本人中学校は7年の歴史しかないので、広く知られていないことを考え、この機会を生かし上海中学校の存在感を伝えるためにも書院と一緒にPRをしましょうと提案させていただきました。上海中学校同窓会は会報を19冊出しています。その中に色々な記録が書かれています。しかし、上海というキーワードを中心にして学徒たちが上海をどう見たかという本は今までほとんどないわけです。

上海中学校の話をしなすと、中学校が国民党に接収された時に中学生も現場にいました。日本の軍隊は鉄砲を持って整然としています。対する国民党の軍隊はボロボロで、ひっくり返りそうだったそうです。ほとんどの人が赤痢にかかっていたからです。そこで日本側が大きな穴を掘ってそこで排便をさせ、建

物の中で治療するという対応をしていたそうです。中学生の目の前でそういう光景が繰り広げられたという記録があります。それから敗戦の直後の混乱期の中で日本人の居留民が多く集められ、大人の中にはそこで先生になった人、あるいは教員であった人たちが塾を開き、学校を開いて小中学生の教育を一日たりとも欠かさなかったこともわかります。これは日本への引き揚げまでずっと続いたことです。そういう環境の中で中学校の生徒さんたちは勉強を無事できたようです。大混乱の中でもそういう秩序でもって人々が協力しながら対応したとのことで、日本人というのは凄いなと思います。

まだ色々お話することがありますが東亜同文書院に関しましては45年も歴史があり書物がいっぱいありますから、改めて書いて



もらうのではなく、書いたものの中から上海をキーワードに入れられるような作品を中心に私のほうで選ばせていただき、編集をさせていただきました。もう一つ面白かったのは、上海中学校は7年間しか存在しなかったのですが、折しも東亜同文書院が大学に昇格して予科、さらには書院に専門部ができた時に、上海中学校から書院に入られた方が専門部を含めて全部で74人もおられたことがわかったことでした。もう10年あれば完全に書院付属中学校になったかもしれないと思ったりしました。そういう歴史も当の中学校卒業生はほとんど知らなかったのですね。そういう経過が分かったことは大きな収穫でした。これが出版された後、朝日新聞の記者がセンターに来られたので、これをぜひ紹介してほしいと言ったところ、上海日本人中学校の記録の中からいくつか朝日新聞で紹介してくれました。そのため、この件については色々な問い合わせが結構あり、好評でした。上海日本人中学校同窓生の皆様へは、その新聞をお配りしたいと思います。以上、説明させていただきました。どうもありがとうございます。

**三好** 次に、日常的に様々な業務、研究に関わっております研究員の武井義和さんです。

**武井** 武井義和でございます。記念センターでは研究員という身分です。



今という研究に関心を持って取り組んでいるかについて簡単に紹介いたします。主に、孫文の支援者で青森県弘前出身の山田良政・純三郎兄弟について研究しております。私は、東亜同文書院、山田兄弟についてあれこれ研究したい、色々調べたい、知りたいという思いが強いですが、あれこれ調べてばかりで、なかなか一本の線に繋がっていかないため、研究対象を絞らなくてはいけないと思うようになりました。現在は主に山田良政・純三郎兄弟の研究を中心に行っております。山田兄弟については2011年と2014年に写真資料を中心にブックレットを出させていただく機会があったのですが、まだまだ明らかになっていない点があります。山田兄弟、特に純三郎の思想面とか日中関係観は東亜同文書院、あるいは南京同文書院に在籍していた時の影響があったのではないのか。そういった辺りを今後の研究課題として取り組んでいきたいと考えております。

東亜同文書院については、最近、日本の政治思想史や外交史などの分野の先生方と一緒に研究グループに参加させていただくチャンスがございました。『近代日本の対外認識Ⅱ』という本が東京の出版社（彩流社）から出されました。戦前日本の知識人たちは世界をどのように見ていたのか。そういった観点からの論文集ですが、その中で東亜同文書院で明治・大正期の長年に渡り教授を務めていた大村欣一という、当時としては中国論が一番多く発表した教員ですが、その大村が書き残した論文を元に東亜同文書院教員の中国認識の一事例として執筆したことがございます。山田兄弟を中心にしなから東亜同文書院教員の中国認識がどのように形成されていったのかという点も関心があるテーマですので、そちらのほうも取り組んでいきたいと思っております。

**三好** 続きまして同じく研究員の石田卓生さん。3月の初め、上海にあります上海交通大学に藤田名誉教授、石田さん、事務の田辺さんそして私の4人でお伺いしました。以前続けていた研究交流を再開しようということが目的でした。その時の見聞も含めまして石田さんからお話ください。

**石田** 石田卓生と申します。よろしくお願いたします。現在、東亜同文書院大学記念センターの研究員として東亜同文書院関係の



研究を進めております。最近ですと、中国研究所の『中国研究月報』第72第2号に『華語萃編』初集にみる東亜同文書院中国語教育の変遷―統計的手法を援用した分析―という東亜同文書院の中国語テキスト『華語萃編』についての論文を発表しております。

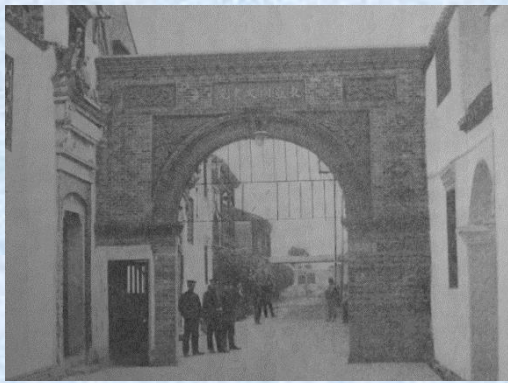
この3月、上海交通大学に行き、現在の上海で東亜同文書院関連の場所がどんな姿になっているのかを見てきましたので、写真を交えながら紹介していきます。

これは皆さんご存じの豫園の現在の姿です。有名な湖心亭の後ろにはたくさんの高層ビルがそびえ立っています。こちらは東亜同文書院卒業アルバムにある同じ場所の写真です。先ほどの高層ビルなど一棟も見えませんが。これだけでも、上海の変化の大きさがお分かりになると思います。

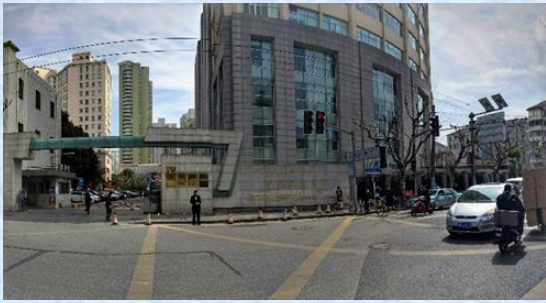
今回、回った場所を上海の地図で見てみましょう。東亜同文書院と言っても、キャンパスの移転がありましたので、上海市内には計

4カ所の校舎跡があります。高昌廟桂墅里校舎に始まり、赫司克而路仮校舎、徐家匯虹橋路校舎、そして徐家匯海格路校舎です。それぞれが現在、どのようになっていっているのかを見ていきましょう。

こちらが最初の高昌廟桂墅里校舎の当時の写真になります。※① 上海では「里弄」(リーロン)と呼ばれる横町の奥まったところにあつたことが分かります。長らく、この場所の正確な位置や現状は分からなかったのですが、今回の訪問で上海交通大学医学院附属第九人民院という立派な病院になつていたことを確認することができました。当時の写真と同じ角度で撮った写真がこちらです。※②



※①



※②

次の校舎が、この当時の写真に写る赫司克而路仮校舎です。※③ そして、こちらが現在の写真です。※④ 建物はまったく違いますが、街路はそのまま残っており、東亜同文書院があつた頃の雰囲気伝えていました。今は養老院になっていました。



※③



※④

次に、徐家匯虹橋路校舎を見ていきましょう。東亜同文書院について紹介される場合に最もよく使われるのがこの校舎です。この写真は正門の前から立派な本館を撮影したものです。※⑤ こちらが、その現状の写真です。※⑥ 街の区画や街路の形から、ここに東亜同文書院があつたということを想定することはできませんが、現在は住宅街となっており、東亜同文書院の痕跡はまったくありません。



※⑤



※⑥

せんでした。「東亜同文書院跡」といったプレートや石碑があつても良さそうなものですが、その設置は現実的には難しいのかもしれませんが。こちらの写真の東亜同文書院学生寮の辺りの現状を見てみても、このようにただの住宅街です。もう一枚、これは当時のキャンパス内にあつた中華学生部の校舎です。この跡は道路の拡張工事などによって区画の形自体が大きく変わってしまったっており、当時の地図と照らし合わせながら見ないと大凡の位置すら分からない状態になつていました。これは東亜同文書院の本館、すなわち一番立派な建物が建つていた場所の現在の姿です。このように地元の人が通う下町のスーパーマーケットになつています。八百屋さんとか魚屋さんとかが入っている大変活気のある場所になつております。東亜同文書院を訪ねるといふ意味では、その痕跡すらない現

状は寂しいものではありません。しかし、東亜同文書院の理念は中国に根付こうというものでしたから、中国に馴染んだ、あるいは溶け込んだと捉えるならば、それは東亜同文書院が昇華した姿だと言えるのかもしれない。

最後の校舎である徐家匯海格路校舎を見ていきましょう。※⑦ 今日お越しの方はご存知かもしれませんが、この校舎は日中戦争の最中、上海交通大学の施設を東亜同文書院が借用していたものです。この写真に写っているのは、現在の上海交通大学の正門です。同じ場所が写っている東亜同文書院卒業アルバムの写真がこちらです。綺麗になっていますが、東亜同文書院時代そのままです。この他に図書館や校舎など、いくつかの建物は東亜同文書院が入っていた頃のものが残っています。その中でも特に紹介したいのが、この写真の学生寮です。東亜同文書院時代は西寮だったのですが、今も学生寮として使われています。写真は現在の上海交通大学の学生が布団やら洗濯物を干している様子ですが、同じような光景が東亜同文書院時代にも見られたはず。かつて日本人学生が学び、生活していた場所で、中国人学生が同じようにキャンパス生活を送っているかと思えば、なかなか感慨深いものがあります。この優勝カップのようなものとお皿は、上海交通大学の档案館に収蔵されている東亜同文書院の遺物です。優勝カップのようなもの

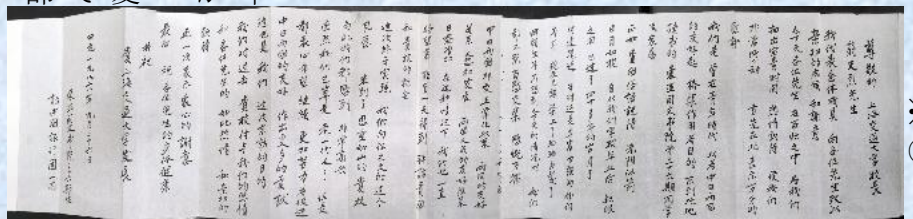


※⑦

のは、銘文を見るに1937年に長崎高等商業学校の卓球部から贈られたものです。この時期、東亜同文書院は第二次上海事変の戦禍を避けて長崎に避難していましたから、その際に卓球部間で交流があったのでしよう。

お皿は、見てのように「同文」というマークが入ったものです。このようなものは、もちろん国内には伝わっておりませんので初見です。学生が使うには華奢ですから、お客さんを接待する際にも使われたのかもしれない。

この写真の中国語で書かれた巻物も档案館に東亜同文書院関連文物として保存され



※⑧

ているものです。※⑧ 東亜同文書院関連といつても、戦後のもので、1986年に東亜同文書院第36期卒業生の有志が上海交通大学を訪問した際のスピーチの原稿です。全文が中国語です。内容からは、上海交通大学の学長が直々に第36期生と会うなどの歓迎に対して第36期卒業生が感激している様子うかがえます。

以上が東亜同文書院の校舎の現状紹介ですが、東亜同文書院に関わるそのほかの場所についても少し見ていきたいと思います。

東亜同文書院の第1期生に坂本義孝先生という方がおりました。東亜同文書院卒業後にアメリカに留学されて、南カリフォルニア大学やコロンビア大学、ニューヨーク大学で学び、帰国後は母校東亜同文書院の教授になりました。同じキリスト教信者の内山書店の内山完造さんとも交友があり、その回想の中にも登場しています。坂本先生は、キリスト教の信者で、上海日本人YMCAの理事長も務めた上海の名士でした。この写真は、そのYMCAのビルです。こちらは坂本先生が住んでいた阿瑞里という横町です。ご息は、もうお亡くなりになっておりますが国際政治学者で東京大学名誉教授坂本義和さんという方なのです。その方が幼少期を過ごされた建物が写真のようにそのまま残っています。

こちらの写真は、東亜同文書院の日中両国教員が協力して作り、授業で使っていた中国



語テキスト『華語萃編』です。このテキストは、上海の蘆澤印刷所という日本人経営の会社が印刷、製本していました。この写真は、その蘆澤印刷所の現在の様子です。かなり古い建物のようなので、当時のものがそのまま残っているようでした。道に面した部分はお店や飲食店になっていましたが、裏手の昔の日蓮宗本圀寺の方から中へと入っていくことができました。そこは写真のように洗濯物が干してあったりする住人の日常生活の空間でした。そこに一人おばさんが座り込んで雑誌を読んでいたもので、

「昔、ここは印刷所だったと知っていますか。」と尋ねてみると、

「そうですね。日本人の印刷所だったけど、今は改築してたくさん人が住んでいます。」と答えてくれました。おばさんといっても、戦前を知っているような年齢には見えませんでしたから、地域の歴史についてレクチャーを受けているようです。

以上、東亜同文書院の校舎跡地や関係する場所の現状を紹介してきました。これ以外にも、敗戦時に中国に接収された様々な資料は北京の国家図書館に収蔵されております。私は2015年に国家図書館で、そういった資料を実見してきましたが、おどろくほどたくさん収蔵されていました。今後は、そういった資料も調査しつつ、東亜同文書院についてより詳細に研究を進めていこうと思います。

**三好** ありがとうございます。そして事務担当責任者の田辺勝巳さんです。けっして裏方などではなく、重要な同僚でございます。こういうしつかりした同僚の方が叱咤してくださるおかげで、本センターがなんとか動いていると言っても過言ではありません。

**田辺** 皆さん、恐れいたします。研究支援課長としてこの場で初めて司会をさせていただきますのは7年前です。長く研究支援課を担当させてもらえるとは思わなかったのですが、いつぼう、私も愛大卒業生ですので豊橋校舎の旧本館（現在の大学記念館）、そして継承されている東亜同文書院を、今の世代にどう繋ぐかということ、いつも意識して業務をやらせてもらっています。

毎年この授賞式のやり方を変えさせていたでいるのも、お渡ししております『基金会ニュース』へ皆様のコメントを記載して、後世に残したいな、と思って印刷させていただいています。今回、私も初めて上海に同行させてもらいました。やはり現物を見ないと分からないですし、それをビデオとか写真等々でお伝えをして次の世代に繋げて長く愛知大学がこの歴史からスタートしたのだということを広めようと頑張っております。これからもご支援をお願いしたいと思います。

今日、事務のメンバーは、私以外に誰も連れてくることはできませんでした。というの



も3月末は年度末で、研究支援の業務が多忙でございます。来年はもう少し早い3月上旬辺りに開催させてもらおうと思っております。これからもよろしくお願い致します。ありがとうございます。霞山会の皆様は、次の理事会があるそうです。そこでマイクを霞山会の堀田さんにお渡ししたいと思います。

堀田 皆様、こんにちは。山田正様、いまだに「山田理事長」とお呼びした方がすつきりといたしますが、今日は東亜同文書院記念基金記念賞の授賞おめでとうございます。先ほど、理事長の池田維からもご説明差し上げましたように、山田理事長の在任中、『Think Asia』という広報誌を創刊いたしました。



当会ではこの広報誌の企画といたしました。近衛篤麿に関するシンポジウムを一昨年から行っております。昨年12月には大分・別府の立命館アジア太平洋大学で「歴史に学ぶ・明治期アジアへのまなざし」より良き関係構築を目指して」というテーマで実施いたしました。

また本日皆様にもお配りさせていただいておりますが、4月には青森県弘前で「明治アジア主義と東北・津軽―近衛篤麿、陸羯南

そして東亜同文会をめぐる人脈」と題して、近衛篤麿の弟で津軽家に養子入りした津軽英麿という人にも焦点をあてたシンポジウムを行います。東亜同文会との由縁を弘前の皆様も交えて考えてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

では、弊会常任理事の星より一言ご挨拶させていただきます。

星 皆さん、お忙しいところご出席いただきましてありがとうございます。今日は霞山会の元理事長が受賞できたという事で非常に嬉しく思っております。

私は霞山会に入って16年ぐらいいなくなりました。私が昔在籍しておりました丸紅の会長は春名和雄さんでございました。東亜同文書院卒業で大手日本企業のトップになった方というのは、数えるほどしかないのではないかと記憶しますが、私が上海に駐在している時にその春名さんが何回もやつて来られまして、市内を連れ回して色々な説明をしてくれたのです。ただ上海交通大学はほとんど行かず、どうして行かないのですかと聞いたところ「ここは東亜同文書院が占拠したところだから俺は行けないのだ。恥ずかしくて」と言っておられました(注・第2次上海事変で虹橋路キャンパスが焼失した同文書院は1938年から上海交通大学のキャンパスを使用していた)。それは本当なのかという疑問を持ち始めましたが、交通大学と共同で



行った3年間の共同研究です。その過程で東亜同文書院の歴史に関する、藤田先生も「こんな資料初めて見ました」という色々な資料が出てまいりまして、事実関係が把握できました。それらは資料集として冊子にまとめられておりますので、それをご覧になっていただくと、「占拠」か「借用」か、という経緯の一端がお分かりになるかと思えます。今後ともこの東亜同文書院大学記念センターがさらに発展するように、ぜひとも学長よろしくお願致します。また本日の基金会理事会には弊会理事長も基金会理事として参加しておりますので、さらに発展させていきたいと考えております。よろしくお願致します。

堀田 ありがとうございます。続いては、常任理事・研究主幹の阿部からご挨拶をさせていただきます。

**阿部** 霞山会の阿部でございます。私が申し上げようと思っておりますことは、池田理事長の式辞と星常任理事の挨拶の中で述べられてしまいましたので、その中で触れられていなかったことについてご紹介させていただきます。



今年が霞山会の創立70周年ということば池田理事長からも申し上げたわけでございますけれども、今年の10月を完成目標に東亜同文会時代も含めた霞山会の歩みというテーマの映像資料の作成を企画いたしました。皆様にご覧いただくべく現在作業を進めているところでございます。

またその他に70周年記念の出版事業と致しまして、『近代中国人名辞典』の修訂版を編纂して今年3月に国書刊行会より出版致しました。この刊行を記念して、編集にご尽力いただきました慶應義塾大学の山田辰雄名誉教授をはじめとする皆さん方にお集まり

いただき、近代中国と日中関係というテーマでシンポジウムの開催準備を鋭意進めたいるところでございます。皆様ぜひご期待いただけましたらと思っております。どうもありがとうございます。

**堀田** 最後に元文化事業部長で、現在は交流担当のアドバイザーであります倉持からご挨拶させていただきます。霞山会で一番古いスタッフということで東亜同文会とか同文書院を含めた昔の人的なつながりなどで、私も色々歴史的なことなどを質問したり、人を紹介してもらったり助けってもらっています。

**倉持** 倉持でございます。堀田からの紹介にありましたように、霞山会でこれまで文化事業全般を担当してまいりました。在席の皆様におかれましては、平素よりシンポジウムなど多方面にわたりご協力いただきましてありがとうございます。引き続きよろしくお願い致します。

**堀田** 最後に私、堀田でございます。先ほど突然司会を命じられました緊張し、冒頭で自己紹介を失念しておりました。文化事業部で研究員をしております。この基金会表彰式には5年ぐらい前から参加させていただいております。

また東亜同文書院大学記念センターの研究プロジェクトに加えていただきまして、戦

後に滬友会を中心に起こった東亜同文書院の再建活動と霞山会、愛知大学をめぐるそれぞれの思惑をテーマにいたしまして昨年発行の研究叢書に原稿を書かせていただきました。

実現しなかった東亜同文書院大学「再建」の試みだったので、これを調べていく過程で、霞山会、それから愛知大学、また滬友会の三者のそれぞれ戦後の歩みというのが、過去とどう繋がるのかということ振り返る作業でもありました。歴史の認証というのは難しい部分がありまして、現在はそれぞれの組織の中で解釈が分かれている部分もあるかもしれませんが、東亜同文会という起源は一つであるということで、その中から現在の歴史を我々どう描いていくかということとを頑張つてまとめてみました。興味がございましたら、『近代日中関係史の中のアジア主義 東亜同文会・東亜同文書院を中心に』（馬場毅編、あるむ、2017年）もご覧ください。どうもありがとうございます。

**田辺** それでは皆さん。今からは愛大の先輩の中島寛司さんにマイクをお渡しし、進めていただきたいと思います。中島様、よろしくお願ひ致します。

**中島** これから皆さんと情報交換をしたいと思えます。今日の会は、同文書院の顕彰をするための会です。それが24回続いています。



その影の中には同文書院の皆様が色々思いを託したことをどういうふうに伝承したいかというところで記念基金を作ったという事です。それを作って滬友会があった時には運営をしておったと。その人たちがあ

る程度、人数が少なくなつて滬友会が解散したと。どこへどう託すかという時に霞山会、愛知大学に託した。それが今日に及んでいふと。そういった同文書院の中身をどういうふうに継承して愛知大学につなげたかと。それがどういふふうに着たかという点が私たちに課せられた課題であろうというふうに思います。今日は最初から最後まで非常にたくさんの情報をいただきました。たくさんの勉強をしました。これを糧にして、私どもの生き方において貢献したいと思ひます。

同文書院の皆さまのご参加が非常に少なくなつたということで、今残つていられる方は3名です。関係者3名。39期の阿部弘さんの奥さんであります阿部光<sup>みち</sup>さん。お元気で来てくれております。よろしくお願ひします。

それから40期の田沼菊弥さんの奥さんであります田沼敏子さんです。毎年のように来てくれております。42期の大先輩であります小崎さん。よろしくお願ひします。それでは、色々な感想を含めて、一言ずついただきたいと思ひます。

**阿部(妻)** ご紹介いただきました39期阿部弘の家の光でございます。今年で主人が亡くなつて5年になります。この基金会の授賞式に出席させていただいて4回目になります。主人と年が違いますのでここへ来ますと毎年同じようなことを申しておりますが、主人の面影を偲ぶというか、主人の香りをかぐ



ことができるような感じで皆さんのお話を伺つて主人が話してくれたことと重なるものですから、それを楽しみに伺わせていただいております。今日はどうもありがとうございます。

**田沼(妻)** 皆さん、こんにちは。私は40期の田沼菊弥の家の敏子でございます。皆さんにお目にかかれまして大変嬉しく思ひます。色々お世話になりましたけど何にもでき



ない私ですが皆さんに援護にしていたいただきまして、ここまでまいりました。本当に色々楽しい思い出を作っていたいただきましてありがとうございます。今後ともよろしくお願ひ致します。

**中島** ありがとうございます。このように会にご出席いただいて、何十歳、年齢が若くなつたのではないかと思います。先ほどの阿部さんは山田純三郎さんの次男であつた方、順造さんの同期でして順造さんが持つている山田家の色々な資料を、最終的に愛知大学へ寄贈していただくように尽力いただきました。今日あるのもそういった先輩方のおかげだと思います。ありがとうございます。書院の発端に色々な先覚者がいます。荒尾精や根津一、そういった方の墓参を毎年やっております。

同文書院の皆様の先覚者への思いは、非常に強いものがあります。そういう点は私どもも見習いたいと思っております。川井学長、今日は同窓会の副会長の村尾さんが来ていますから、愛知大学に対する貢献が少ないよという点があれば一言おっしゃつていただければ、と思います。

**川井** 何も予想していなかつたので整理がついていませんが、今日は東亜同文書院記念基金会の集まりですので、この基金会を継続してしっかりしたものにしていきたいとの

考えを、お伝えします。そのためには、愛知大学と霞山会様のあいだの協力関係を推進していければと思います。機会があれば、私も霞山会様の懇親会等に顔を出して、親交を深めていければと思います。東亜同文書院卒業生の先輩の方々の交流、愛知大学の同窓会との交流の重要性は言うまでもありません。ただ、東亜同文書院の卒業生でご存命の方々はやはり年々少なくなつております。したがつて、東亜同文書院の卒業生の方々の記録をオーラルヒストリーも含めて、藤田先生をはじめとしてこれまでやられてきましたものが、引き続きしっかり残していくことは必要なことであると思ひます。そういう面でも愛知大学東亜同文書院大学記念センターの活動にも大いに期待しているところです。皆様のいっそうのご助言、ご支援・ご協力を賜ればと思ひます。よろしくお願ひ致します。

**中島** ありがとうございます。同窓会としては、大学に対して色々なことを一緒になつて大学の発展に尽くすという点で、学長先生から見たら同窓会はうるさい存在だと思ひするような同窓会に迫力を持ちたいと思ひます。そこらあたりの思いを同窓会村尾副会長から一言お願ひ致します。

**村尾** 同窓会の千葉支部長をやつております村尾と申します。

同窓会の役員をやらせていただいている

関係で、こういう会にも呼ばれまして色々勉強する機会を与えていただき、それをまた同窓会に伝えてもつと盛り上がるようにしなければいけないと思つております。



国立国会図書館大滝前館長さんには、ここでお会いする2年前に、私どもの新年会に講演いただきました。また、霞山会理事長の池田先生にもお話をいただきました。私自身はとても刺激を受けて勉強になりました。私自身は大学にとつてもご縁のある東亜同文書院大学のお話を色々聞きました。継承しなければいけないと考えております。

先ほど、中島さんが言われたようにこの会のメンバーがどんどん減つていくと。私どもの同窓会も、上の人が抜けていって若い人がなかなか入つてこない。これが同窓会に限らず地域の自治会も同様です。

愛知大学も、最近では東京のほうに就職する人がどんどん増えているということなのです。

で、また力を盛り返して、同窓会活動に力を入れて東海三県だけではなく、東京のほうにも出てもらえるようにつなげていきたいと思えます。大学あつての同窓会ですので、一生懸命、大学にも貢献していきたいと思えます。今日はありがとうございます。

中島 ありがとうございます。4月7日に同窓会第一ブロックの役員会が行われると聞いております。愛大同窓会の発展に貢献する議題で盛り上がってほしいと思えます。

大滝 ご指名ですので僭越ながらお話しさせていただきます。私は、大滝則忠と申し、本間喜一先生とのご縁で、この会に参加させていただいております。先生のご生家から300mぐらいの近所で生まれまして。お蔭で、東京に出て大学に入学した時に、本間先生に保証人になっていただきました。

本間喜一先生はご承知のとおり米沢藩の在郷、旧玉庭村のお生まれですが、11歳で父君の弟にあたる東京で活躍する叔父の本間則忠さんのもとに移り、13歳で叔父さんの養子になって、元の小池姓から本間姓になり、ドイツに留学する直前に結婚して分家しました。旧制中学時代から、一高、帝国大学を出て司法官になり、大学に移って結婚され、留学されるまで、その間ずっと、叔父であり養父である本間則忠さんの庇護下にありました。

この叔父さんは昭和13年に亡くなるのですが、現在遺されている本間先生から叔父さん宛の手紙の中では、分家後も含めてずっと発名は「喜一」、宛先は「父上様」という記載で一貫しています。昨年この会で情報として報告させていただきましたが、その叔父さん宛の書簡を含む本間則忠旧蔵文書類がダンボール箱12箱の規模で山形県川西町の旧玉庭村の実家の板倉に遺されていました。一



昨年夏に急遽行った現地調査に、藤田佳久先生にも遠路ご参加いただいて、遺族はじめ関係者で協議し、それらを東京・江古田の武蔵学園記念室の書庫に移すことにしました。膨大な資料を整理する必要がある、それを誰が担当するか。豊橋案もよぎりましたが、とりあえず、私がボランティアとしてやるには東京に移すしかなく、自宅で作業できる規模

の量をはるかに超えており、また安全な資料保存のためにも、武蔵学園記念室にお世話いただくのが最善ということになりました。

その叔父さんは文部省の官僚を経て、大正10年に旧制武蔵高等学校の設立事務を一手に仕切った方なので、その流れで武蔵学園記念室に資料を保管してもらうことになりました。一昨年9月から一週間に一回、私が参りまして、箱開けして整理をしています。12箱のうち先週までに5箱まで終わりました。大体3か月で1箱のペースです。点数にして1箱1千点から1千5百点ですから、あと2年ぐらいはかかりそうです。来年には、もう少し開いたということ報告できると思います。

そういう中で、本間喜一先生のお手紙が昨年の報告では50通ぐらい出てきているとお話しましたが、現時点では合計150通になっていることを今回報告できることは、嬉しいことです。叔父さんが亡くなられたのは昭和13年で、本間先生が上海に移られるより、ずっと前の時代で終わるわけです。ただし、一高入学から大学時代、そして留学前までは養親子の関係にある叔父さんが、各県の幹部職員として地方勤務でしたので、様々に本間先生から叔父さん宛に送られた書簡、そして叔父さんの本間先生宛の書簡の下書きも含まれており、中には長文のものも多いということ、今後、本間喜一先生に関する皆様のご研究の材料にさせていただけることを期待

しております。

もうひとつの話ですが、旧米沢藩の関係者の中で、若者を対象に人材を育成する育英活動があり、明治42年、今から110年近く前に東京・小石川に学生寮を開設します。その開設直後に、帝大生時代の本間喜一先生が3か月間の短期間ながら、在寮されました。この学生寮の伝統は、いまなお連綿として引き継がれ維持され、現在も東京で現役学生の寮生24名が生活を共にしています。私も4年間お世話になりました。この学生寮の運営母体は、現在では公益社団法人となった米沢有為会という、旧米沢藩、現在の山形県置賜地方の在住者と出身者を中心とした育英団体であり、昨年、私はこの団体の15代目の会長に就任いたしました。本間先生が在籍された当時の第3代会長は、現職の内務大臣の平田東助でありました。

そのような歴史を引き継ぐ関係にも関わらせていただき、本間先生とのご縁が深いことを改めて実感しております。今日こういう会に参加させていただくことも、本間先生に深いご縁をいただいたことゆえです。本間先生と直接のご交流があった多くの皆さんとお会いでき、また、本間先生の様々な活躍をお聞きできることで、何か非常に大きな刺激を与えられております。本間則忠旧蔵文書類の整理で、明治末期から大正、昭和初期の巻紙の毛筆の書簡類の難読のものに難渋して、喜一先生の筆もかなりの癖字だったよ

うな感じで、それでも読みやすい方ではありませんが、読めなくても読み続けてみようという気力を今日は改めて与えていただきました。ありがとうございます。来年には、整理が何箱目まで進んでいると報告できればいいなと思っております。

**中島** ありがとうございます。私にとって本間喜一先生は、東亜同文書院大学最後の学長、愛知大学ができた当初からの記憶になります。それ以前の本間先生の生き方というか、それについての内容が徐々にお手紙で博言できるというように期待をしております。

本間先生の欽慕の会は、毎年命日の前後に小平で行っております。本間喜一先生顕彰会というものがあり、愛大28年卒の豊橋の越知さんが主催しております。今度の5月にも墓参には越知さんが見えます。さっき紹介した4月7日の根津さんの墓参にも越知さんが見えます。

今のお話から本間先生から色々教わる内容が多いと思いますので、今後の発表に期待をしておりますのでよろしくお願いします。ありがとうございます。では、アメリカにおられ、同文書院、愛知大学を大いにPRしていただいた仁木さん。

**仁木** 私の名前は仁木賢司と申します。今は日本に帰国しまして約2年半、神戸の垂水区に住んでいます。緑内障を患いまして、本を

読むことも文字を書くことも不可能な状態になっております。したがって、私は学芸専門司書（キュレーター）という専門職を辞した後、もう何もできないという現状に鬱々とした生活をしておりました。けれども豊橋の東亜同文書院の先生方には霞山会主催のシンポジウムや、愛知大学の講演会等で、頻繁にお会いする機会がございます。

私も数年前にこの壇上に上がり、賞を頂いたこともございます。私は皆さんのように中国の専門家でもないですが、東亜同文書院の専門家でもないのですが、皆様のご好意をいただき、余生を生き抜く糧とさせていたたく昨今です。

大学は上智大学文学部哲学科を卒業しました。その哲学は日本とか東洋とか関係のないスコラ哲学というヨーロッパの哲学の根源になるものを4年間学びまして、その後約1年半は神学部に進み結局6年弱上智大学に在籍した後思うところあって中退しました。

それから留学をすることになったのですが、西洋の勉強を根底的に自分の生業としてやろうとしていた者が、なぜ東亜同文書院なのか、というような質問を皆さんから良く受けます。6年間の上智大、中南米やアメリカに行き学問、見聞を重ねながら常に自分の道に何か不足していると感じていました。何が不足しているかそれは自分がアジア人でありながらアジアを知らないということ

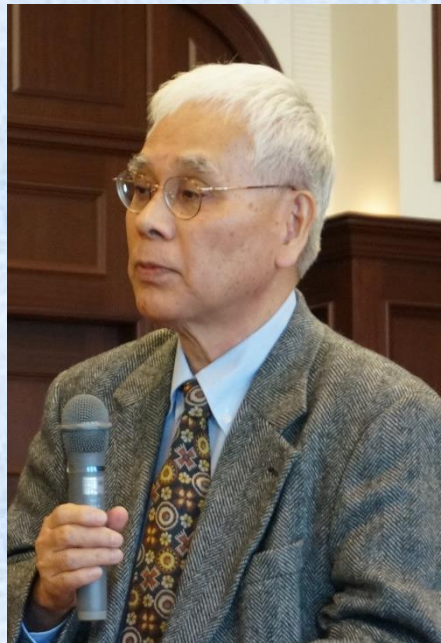
した。私はアメリカへ留学した時に上智大学から行き先を見つけていただきました。ニューヨーク市クイーンズ区にある聖・ジョンズ大学というカトリック系の大学で、アジア学部系の大学院に籍を置くことになりました。そのアジア学研究所は台湾にあります孫文記念館の全クミニアチュアで、3分の2ぐらいの大きさの建物がそこにあります。それは100%、台湾政府（台湾国民党）の出資で建てられた建物だと聞いております。

当時その大学には、私が入りました1977年には約2万5千人のアメリカ人学生がいました。外国人学生は欧州、アフリカ、中南米などからも多く、そのうちアジア系は多分350人ほどいたと記憶しています。理系に多く在籍しており、成績は優秀ときいておりました。アジア学研究所の東洋人の学生のほとんどは、台湾政府（台湾国民党）の公認を受けた学生達でした。そういう状況の中で私は唯一の日本人でした。そこに奨学金をいただいていたのですが、西も東も分からずしかもその奨学金がどういふところから出ているのかも知らなかったのです。アジア学研究所創設者で所長の、Dr.Sih Kwang-cheng から早急にNYに来なさいと言われ、取り敢えず渡米しました。

私はそこから奨学金をいただいて勉強を始めたのですが、はじめに何を勉強していいかも分かりませんでした。ただそこが台湾にある、国父・孫文記念館と深い関わりを持

つ研究所であったために、漠然と孫文を中心に中国学に入ることとなったのです。

アジア学専攻の数人のアメリカ人・韓国人そして私以外は、台湾政府から支援を受けた関係者ですから、すべてが政治家の塊みたいな人たちでした。何か事があるとすべて政治的な討論になるのです。私は何にも分からなかったし、大学院レベルの英語力も不足、中国語の履修は必須、専攻科目の勉強をしなけ



ればいけない、英語でそれを理解しなくてはいけない、けれど私の英語力はつたない……だからもの凄くジレンマに陥り、最終的に家内が東京におりましたので、頼んで日本語の資料をかなり送ってもらって日本文―中文―英文と目まぐるしく対比しながら中国を研究し始めたのです。この修士課程での勉強は1年半続き、疲労困憊しましたが、私のそれからのアメリカ生活の大いなる強みにな

りました。とにかく寝る暇もなく、読んで読み倒して皆の授業についていけるように努めました。

各学期の科目別に数回提出しなくてはならないレポート・小論文はすべて英語で書くのは当然のことでした。1年半でマスターは絶対に終わろうと決心していたので、そのマスターが終わるために25本以上の小論文を提出しました。その作業ほど私の人生で学問することの厳しさと苦しさを学ばせてくれた事はありませんでした。図書館でアルバイトをしていました縁で、その館長である年取ったアメリカ人の神父さんに、私の書いたレポート類の英語のチェックを頼み込みました。初めの頃は本文が全く見えない程赤字で直されていきました。それがショックで私は泣くに泣けなかつたのですが、少しずつ赤字がなくなっていくようになり、それが一つの快感に感じるようになりました。同時に私は台湾系中国人の同僚達との関わりを深めるようになりました。そこで初めて中国に触れ、台湾系中国人の友人たちを通じて、自分の中に中国という大きな課題を、どのように消化していくかを、考えつつ院生としての生活をしました。

最終的に私はコロンビア大学に就職しました。コロンビア大学図書館は膨大な研究資料を、20を超す専門図書館に所蔵し、その内東アジア図書館、C. V. Starr East Asian Library は、当時約80万冊強の中国語、日本



語、朝鮮語で書かれた資料を所蔵し、内日本語による資料は約33万冊ほどありました。それを私が責任者として監督、資料選択購買、そして利用者サービスを約10年弱いたしました。

このような生活を始めた時に直面したのが、西洋と東洋との接点に対する積年の思いでした。その課題への関わり方をどのように考え消化すればいいのだろうと、悩みながら日々の仕事に忙殺されていきました。自分の心の中には、日本の大学で6年の間、正統な西洋を勉強したという経験と、新しく東洋を勉強し始めたという私の様な者にとっては、西洋と東洋との接点の理解がなければ大変難しい立場の仕事なのです。

聖・ジョンズ大学では中国の近現代史を中心にやりました。その時に自分の目の前に現れたのは革命だったのです。その革命を指導していった洪秀全と孫文。この二人の巨頭がどのような関わってきたか。その時に孫文の三民主義というのに出会い、初めて私はこの人は当時の政治的混乱の中国を統べる人なのではないかと思ひ、孫文に関わるようになりました。というのが私の個人的バックグラウンドなのです。

その時以来、それを自分の頭におき仕事をする様になりました。中国語文献専門の中国人は割り当てられた予算で中国文献のみを収集します。日本に関わる文献予算は中国の倍ぐらいあったのですが研究資料の価格は、

最低でも3倍はしました。でもできるだけ日本の歴史と文化と文学等、すべてを含めた上で中国との関わり合いがある文献、それも日本語で書かれた文献にも私の判断で予算を使い始めたのです。その時に東亜同文書院という存在をどうしても無視する事が出来ませんでした。だから仕事をしながら、それに対して色々角度を変えて中国との関わり

の近現代史を、自分で勉強し始めたのです。その後色々あってミシガン大学というところに転職しました。その時に私は意を決して豊橋の東亜同文書院大学記念センターに足を運び、藤田先生をはじめ皆さんにお会いすることができるようになったのです。愛知大学の図書館の中に眠っていた素晴らしい宝物、資料を目の当たりにして、これは絶対にアメリカになくてはならないと思ひ始め、それがマイクロ化されてミシガン大学図書館の本館である、ハッチャー大学院図書館所属のアジア図書館の大切な資料にすることができたのです。非常に高い値段だったので Japan Foundation のコンペティションに応募し、資金を援助されたのです。私のプロポーザルでその資料をミシガン大学の図書館に取得することができたのです。それ以来、私は豊橋参りを今も続けております。これからもよろしくお願い致します。

**中島** ありがとうございます。素晴らしい経歴、実績をお話いただきました。

先ほど、孫文の話が出ましたが、そういった関係のシンポジウムに講師として招かれれば出ていただけるとのことです。ありがとうございます。

孫文と関係がどのようなかですけれども、汪兆銘さんのお墓が高円寺にあるというのを皆さんご存知かどうか。私は行ったことがないので近く行ってみたいと思います。それでは栗田先生、一言お願いします。

**栗田** 第二回の記念賞を受賞させていただきました栗田でございます。もう二十数年前になるのかなと、感慨深くしております。先ほど阿部弘さんの奥様のご挨拶されましたが、私、随分昔に阿部先生にお世話になりました。今、愛知大学が所蔵されている山田家文書が愛知大学に入る前のことですが、当時霞山会に入らせていただき、同文会史をまとめていた関係から、今は亡き山田順造先生から、ちよつと来てくれというようなことでお邪魔したところ、阿部先生や山田先生のご友人の方々がいらつしゃって、色々ご教示いただきました。その後東亜同文書院についてまとめて一冊の本にしたのですが、そのもとになった原稿を雑誌に連載していたのはもう30年ぐらい前になります。忠臣蔵の早野勘平じゃないですが、30歳になるかならないかという時でございました。

今日ここにお邪魔する前に、電車の中であ

る小説を読んでいたら、その小説の中で「60を過ぎた老人」という表現がありました。私も「30になるかならずや」という年からすでに老人と言われる年になったのかなとちよつと思いを深くしております。賞をいただきたい『上海東亜同文書院』を出した当時、正直申し上げて申し訳ないのですが、東亜同文会や東亜同文書院というのは帝国主義の手先であるというような評価が、一般的でございました。

ある大学で教えていた時に、そろそろインターネットが盛んになる頃でございましたが、「栗田は右翼である」というような書き込みをされた記憶がございます。それはどういうわけか分かりませんが、今度は2、3年前、本人は変わつたつもりは全然ないのですが、やはりちよつと書き込みされて、「栗田は左翼の活動家だ」と批判されました。「左翼」はまだ分かるのですが、「活動家」がつくのはどういうことなのか。世の中それぐらいに変化したのかなと思っております。

30年の間に東亜同文会や同文書院、あるいは日本のアジア主義に対する研究はかなり進んだと私は思います。日本国内、国外を問わず、もの凄くプラス方向に進んでいると思えます。プラスの方向というのは最初に結論ありきではなくて、色々な評価をするにしても、まず、その資料を実証的に見て、その上でどういう評価をしようか、というふうに変わってきたということです。これはいいこと



だと思いません。

これは中国の方には失礼かもしれませんが、中国大陸でも、いまだに「帝国主義の組織だけども」という枕詞がつくようです。同文書院の中国研究は非常に優れていたと、そういうふうに変わってきております。特に若い方はそうです。非常にいい傾向だと思います。十数年前から日中関係を客観的に見ていこうとする傾向は出ていると思うのですが、更にここまでできたのかなと思つた経験が最近ございました。

昨年12月に霞山会主催の大分でのシンポジウムにおいて、私は近衛篤磨公について報告させていただきました。その一週間後には、今度は愛知大学のシンポジウムに、報告者に対してお答えするという立場で参加させていただきました。さらにその一週間後には立命館大学で大学院生相手の特別講義で

同文書院について話をさせていただきました。

その中でここまでできたのかなと思つたのは、愛知大学のシンポジウムでした。それは愛大が色々出版されている本を中心とするシンポジウムだったのですが、その中で私が凄いなと思つたのは、三好先生を中心とするプロジェクトでした。それは傀儡政権といわれていた政権に対する研究プロジェクトで、確かに傀儡かもしれないが単に自分たちのためだけにやつたのではなく、彼らなりに日中間をどうにかしようということを考えていたのではないかとというような視点からの研究でした。

この視点は新しい視点だと思いますし、善悪ではなくて資料に基づいて、実証的に、実はこういう意図があつたのだがこうなつてしまつた、ということ明らかにしていくということは非常に重要なことだと思います。この方向を目指していたのだけれど何でこつちについてしまつたのか、そういうことを考える必要があると思えます。それは同文会、同文書院の研究をしているともの凄く感じます。まさに同文会、同文書院の研究とは、このままいこうとしたけれど何でこつちについてしまつたのか、あるいはこの可能性もあつたのではないかと、これを考えるうえで極めて貴重な研究であり、これからますます研究されていくべきだと思います。

よく歴史に学べということをおっしゃる

中島 ありがとうございます。

方がいます。どこの国とは言いません。私に言わせれば彼らこそ歴史を学んでほしい。日本人は学んでいないというけれども、彼らこそ学んでいないじゃないかと思えます。具体的な内容については問題があると思えますので申し上げますが、「日本は帝国主義の歴史を学んでいない」ということをおっしゃった方がいます。私は、その方が何で日本がそうだったかということ勉強されてないと思うのです。私は日本の帝国主義が良いとは言いません。むしろ否定的です。だけれども、とある国の合併には、イギリスとかアメリカ、フランスとの帝国主義国家同士の紳士協定としての側面がありました。このことについては、その方は全然言及されていないのです。それどころか、その帝国主義国家のうちの一国に対して、協力を依頼するようなことをやっています。そしたらその議会も一緒になって日本にどうにかしろと言う。決して私は日本がやったことが良いとは言いません。しかし、この国の議会の言い様はやはりおかしい。そして、やはりきちんと歴史を勉強すれば、それに対する反論もできると思うのです。

私たちは反省する意味でも、打たれっぱなしにされないという意味でもきちんと歴史は研究するべきだと思います。そういう意味で同文書院というのは、非常にいい例だと思います。東亜同文書院大学記念センターには、これからも頑張つて欲しいと思います。

藤田 先ほど最新ニュースをお話したばかりでございしますが、東亜同文書院大学記念センターが誕生してから24年目です。すでに四半世紀も過ぎたのかなと思うのです。最初は、愛知大学の学内の中でも今の先生のお話のようにかなりきつい研究環境がありました。図書館にコピー機が2台あり、私がこちら側で書院生の大旅行記録の複写をしていると、隣の方はアンチ書院みたいな方がコピーをしていて、藤田は何でそんな研究するかと言われる状況が当時ありました。

しかし、私は大旅行記録から入ったので大変興味深かったのです。地理学をやっていますから。これだけの大規模な大旅行をやったということは、普通の人ではちよつとイメーヂできないですね。その素晴らしさと凄さには魅了されました。

これは前にもこの席でお話したことがありましたが、イギリスのレディング大学にいた時に講演を頼まれて、この書院生の大旅行の話をする事になり、そのタイトル最初にグレートジャーニーという語句を發表しました。ところが、当日の私の發表タイトルは看板を見たらグレートがなかった。えっと思つたけれども、發表が終わったところ教授が近づいて来て、「すいません、グレートだった」と詫びたのです。日本人にグレートな旅行ができるわけではないという、そういう

ような環境がイギリス人の研究者の自負心の中になりました。けどやっぱり中身を知って、これは凄いいことをやったのだと。しかも、半世紀に渡つて同じ学校が同じようなかたちで、3か月から長い人は6か月ぐらい足で歩いてフィールドワークを行ったのです。足で歩くというのが非常に重要ですね。足で歩くことによつて色々な地域の情報に直接触れられるわけです。そういう実績が記録として非常にたくさんストックされたのです。これについては私が愛大に赴任して最初に図書館に入った時に手に取つた大旅行報告書を読んでびっくり仰天したわけです。その直前に文革の直後の中国へ行つたことがありましたが、その旅行記を読みながら中国の基本的な部分というのは書院生の旅行記録を読むことによつて分かるのではないかなと、非常に大きな期待を持つたことがあり、それでこの世界に入つたのです。

当時は何かそういうような環境があつたがゆえに、誰もあまり読まなかつたのです。だけど大旅行記録をコツコツ読み、研究發表を続けるうちに少しずつ理解する人々がメディアも含めて増えてきました。これも非常にありがたかつた話です。記念センターがオープンして、今日のようなかたちで四半世紀も続いているということは十分評価されてきたということかと思えます。そういう点では私としても非常に心嬉しいし、色々な人が関心を持つていただいて、さらに発展させて

いただけたらいいなと思っっているのです。

最後にせっかくだから今日、学長先生がおられるので。学長先生の前で言うのも何ですけれど、記念センターもそういう点で言うといふぶん長く実績を積んできて大きなクオリティを育ててきたと思います。この前、上海交通大学を訪問したとき、交通大学の学長は歴史が重要として、交通大学の学史編纂と学史編纂室の充実をいぶん後押しをされたということでした。記念センターがより高度化し、発展するために学長やトップの人たちに支援していただいて、研究員たち、若い人たちへの養成にも繋がる支援をしていただけたら非常にいいなと思います。せっかく記念センターが豊橋校舎にありながら、豊橋の文学部の中の東洋史の方々がアクセスしてこないのです。これは非常に残念ですけれど、東洋史の研究対象時代があまりにも古いため近現代と接点のない研究者が揃っているからです。そういう点で上手くいかないところがあります。だから今後の問題ですが、せっかく豊橋に東洋史関係の方々が3人ほどおられるのであれば一人ぐらいは近現代史をやるような、あるいは一般教育科目専門でもいいですけれども、日本史と東洋史をつなげる東アジア国際関係を研究するそういう分野の先生をぜひ取っていただいて記念センターの歴史的部門をもう少し評価していただきたいと思います。私は地理学なので、いつても歴史も非常に感心を持ってやっ

ていますけれど。そういう意味でよりプロの人が東亜同文書院に関わっていたらいいかと思うので、一緒に研究していただければいいのではないかなと思っております。この間、田辺さんという素晴らしい課長さんが頑張って記念センターは色々動いてきたわけで、そういう点で、個人的な力量でもって普通のレベルより高くやってこられた部分もあるわけです。その辺の部分も、今後はさらに実体化ができるようなかたちで発展できたらいいのではないかなと思っております。そしてこれが愛知大学の東亜同文書院の研究発展、さらには書院を軸にしたアジア地域とかグローバルな視点の研究へ展開していったら非常に素晴らしいなと思っております。

中断していましたが、再び上海交通大学との交流の件です。交通大学とはここ2年程あいてしまったものですか、らもう一回きちんと交流関係を維持したいということでしょうか。この写真の中では毛杏先生が一番の中軸です。この方は新しく交通大学に着任された元慶應の留学生。翟新さんという先生で、東亜同文会の研究で学位を得た方です。日本語が非常に上手ですが、我々とは日本語を使わずに中国語でやり取りしていました。こちらの方が新しい組織を統括するキャップです。しかしこのキャップの方は2年前に教授になりました。この彼は記念センターにも出入りしていて、内蒙古大学に職を得て移った曉敏さん。通訳をお願い致し

ました。ということ全体としては非常にいい雰囲気でした。会場は昔の交通大学の寄宿舎の跡ですけど、階下には船舶関係の博物館が作られているその2階の会議室です。ここでこういう会をやっていたのです。

ところで、この日、交通大学が長年編纂してきた大学史完成の報告と記念センターへも8巻分を贈ってもらえることになりました。この新しい8冊ができたということが中国の各大学、たくさんありますけれどその中の大学史でトップになり、表彰されたという話をしてくれました。非常に和やかでスムーズにいきました。今これが完成したばかりの8巻の新しい交通大学史です。この間、非常に忙しかったそうです。もう一つは来年の5月にも、凄い大きな大学史の博物館ができる。だからそれまでまだ忙しさが続くので、それが終わったらまた我々と動き出したいとのことでした。

**田辺** 皆さん、お疲れのところすみません。上海交通大学の毛先生が愛知大学サイドに、上海交通大学に訪問されました霞山会の北川さん、そして星さんのおふた方を凄く、印象深く覚えておられることを、最初に話されました。やはり東亜同文書院、霞山会があって愛知大学に繋がりができているというのを私は凄く感じました。

その後、来日され、日本でもシンポジウムに参加されました。文科省の補助金オープン

リサーチ・センター事業の時のニュースに、その時のカラー写真が載っていたのでコピーを持ってまいりました。これがその時の資料なのですが、お渡ししましたら、その写真に名前が書いてあったのですね。その繋がりの中で、愛知大学との繋がりは日中間がこのような状況下においてでも研究は進めていきたいと。もう一つ、上海交通大学の現在のランキングは6番目くらいだそうです。どんな上がってきているけれども、藤田先生が言われたように、大学の歴史に関することは1番になつていいます。学長にも凄く応援していただき、スタッフも増え、これだけの研究を進めて本ができたということの説明され、本学にも送っていただきました。今、新大学史8巻は船便で輸送中でございます。またお披露目できると思います。

そういう話をされた後に付け加えられたのが、「上海交通大学がやれていなくて愛知大学記念センターでやっている一番凄いものが、日本の各地で展示会、講演会を毎年開催していることだ」と。去年、今年と、名古屋、浜松という愛知県中心の近い所、東海地区に戻ったエリアで開催しておりますが、全国展開やっているとすることは凄いいふうに、上海交通大学のスタッフの皆さんからはお話をいただきました。「そういうところも評価されるのだな」というのを今回感じて帰ってきたのです。

「研究を進めることで、より良い環境を作

っていききたい」と話す中国だからこそ、あれだけ発展したと思います。他のスタッフから聞いた話ですけど、「日本はコツコツと上がっていく。コツコツと進んでいく。逆に言うとなかなか大きくは進まない。中国は、決めてしまったらそれをやれというからITに關しても色々な仕組みが早く変わってきている。日本は中国を学ぶべきだ」とオフィシャルでないところで囁いてくれました。「やはりそうなのだな」というふうに感じて帰ってきましたものです。研究者だけでなく、学生を海外に送ることは時に危険を感じることもあります。しかし、将来の愛知大学のためにこのアジア主義における研究だけではなく、広くグローバルな環境での教育をやっていくことが大切であると感じたのです。

ビデオを撮ってまいりましたが、次回、きれいにまとめお見せできたらと思っております。それでは中島さん、最後に一言、お願いしたいと思います。

**中島** 今、豊橋校舎はご存じのように文学部と地域政策学部と短期大学部だけです。学長先生が、あまり見えないと多分向こうの教職員の方はひがんでいるのではないかと思えますので、そこは一つ心していただければというふうに思います。そして地域政策に関する研究所として三遠南信（東三河・遠州・南信州）地域連携研究センターがありまして、三遠南信の色々な面でリーダーになつてい

ます。そこらあたりも一つ、地域の愛知大学に期待する点が非常に大きいと感じます。それでは小川さんから一言。

**小川** 私は昭和33年に愛知大学を卒業しまして、1995年富士ゼロックスという会社を退職しまして、現在、日本寮歌振興会で広報委員を務めています。

寮歌といいますが昔の寮歌です。旧制高等学校の学生、大学予科の学生が、自らの青春時代を歌った歌を後世に残そうというこ



とで、昭和36年から日本寮歌振興会が生まれ日本寮歌祭があるのです。この寮歌をぜひ後世に残していきたいということで、全国の寮歌祭、北は札幌から南は九州、沖縄、場合によつては台湾まで足を伸ばして寮歌の伝承、普及につとめております。その時に東亜同文書院に關連したお話を一つ申し上げます。

愛知大学として我々は登板するわけでございますけれど。愛知大学は、昭和21年に成立した旧制大学50校の中の最後の旧制大学なのです。現在800の大学がありますけれど。旧制49番目と非常に老舗でございます。しかしそのルーツを辿れば1901年、上海に生まれました東亜同文書院がルーツ。兄貴にあたります。そうしますと、必ず反応がないことは一切ありません。「そうか、君たちは東亜同文書院の末裔か」と。俺の親父は東亜同文書院の第何期生であったとか、私の叔父さんは東亜同文書院の何年頃の人です。必ずそういう反応があります。

一つだけ最近の話をご紹介申し上げます。東亜同文書院の末裔で大変良かったと痛感したことがあります。先月の2月20日、金子兜太が亡くなりました。もう誰もがご存じです。秩父の出身でございます。東亜同文書院の末裔でありますと申し上げたところ、金子千侍さんという人が我々のテーブルに参りまして、皆さんは東亜同文書院の人ですかと。私の親父、金子元春は大正7年から大正14年まで7年間、東亜同文書院の校医をやっておりましたと自ら名乗っていたいただきました。金子千侍さんのお兄さんが金子兜太、兄貴です。有名な方です。このお父さんの元春さんが今言いましたように東亜同文書院の校医をやっていた。ここで一つ世界が広がって同文書院の方々、このように頑張っているのだなと痛感しました。

一つ申し上げますと、金子兜太さんが上海東亜同文書院の父親の官舎で6年ぐらい育ったのです。3歳の時に官舎の前の広場でロバに乗って遊んでいた。3歳ですよ。ロバから落っこちて泣いていたと。お父さんの金子元春は何と言ったか。男の子が泣くもんじゃないと怒ったのだそうです。母親がそれを見ていて3歳の我が子にこんな厳しいことを言うのか。千侍さんはうちの親父は厳しい人でしたというような話をしていただきました。そのように繰り返しになります。この一つをご紹介申し上げますね。この一つに感謝の念を捧げたいと思います。

**中島** ありがとうございます。まだ色んなお話が尽きないと思いますけれども、この辺りで中締めにしたいと思います。その前に寮歌を皆さんで歌いたいと思いますのでよろしくお願ひしたいと思います。

それでは皆さん、愛知大学逍遙歌を歌います。イー、アル、サン。

### 【皆で歌う】

最初の長江の水というのは書院生が作ったものです。それから愛知大学の逍遙歌は亀田さんという方が書院、愛大卒という方で両方とも雰囲気似ているのではないかと思います。ありがとうございます。

**田辺** これにて今年度の記念基金会の授賞式を終了させていただきます。ありがとうございます。



# 本間先生欽慕の会

平成29年5月13日(日) 東京小平霊園



## 写真お名前(敬称略)

夏目益良	関口忠彦	飯塚啓	山田晃司	中山弘	戸田七支	荒尾初雄	殿岡晟子	森健一	定野敏男
中島寛司	加藤大策	鳥越剛	奥村進	小川悟	松本優幸	伊藤登美夫	杉浦福夫	岩城龍夫	有森茂生
			富増和彦	小川千尋	小川千尋	伊藤登美夫	藤田佳久		

正午に天乃家石材に集合し、都下小平霊園の墓苑に移動し献花。杉浦福夫前東京支部長から挨拶がありました。

最初に、富増和彦愛知大学副学長、校友課の加藤大策氏、藤田佳久名誉教授、夏目益良東京霞が関オフィス所長などからそれぞれ所管の挨拶がありました。献杯のあとは、美味しい料理にお酒が入り歓談の時間を送りました。

今回の出席者は、本間家3名をいれ26名でした。記念写真は、雨のため天乃家石材店内で撮りました。



# 根津山洲先生墓参 桜花忌

平成29年4月8日(日) 横浜の鶴見総持寺

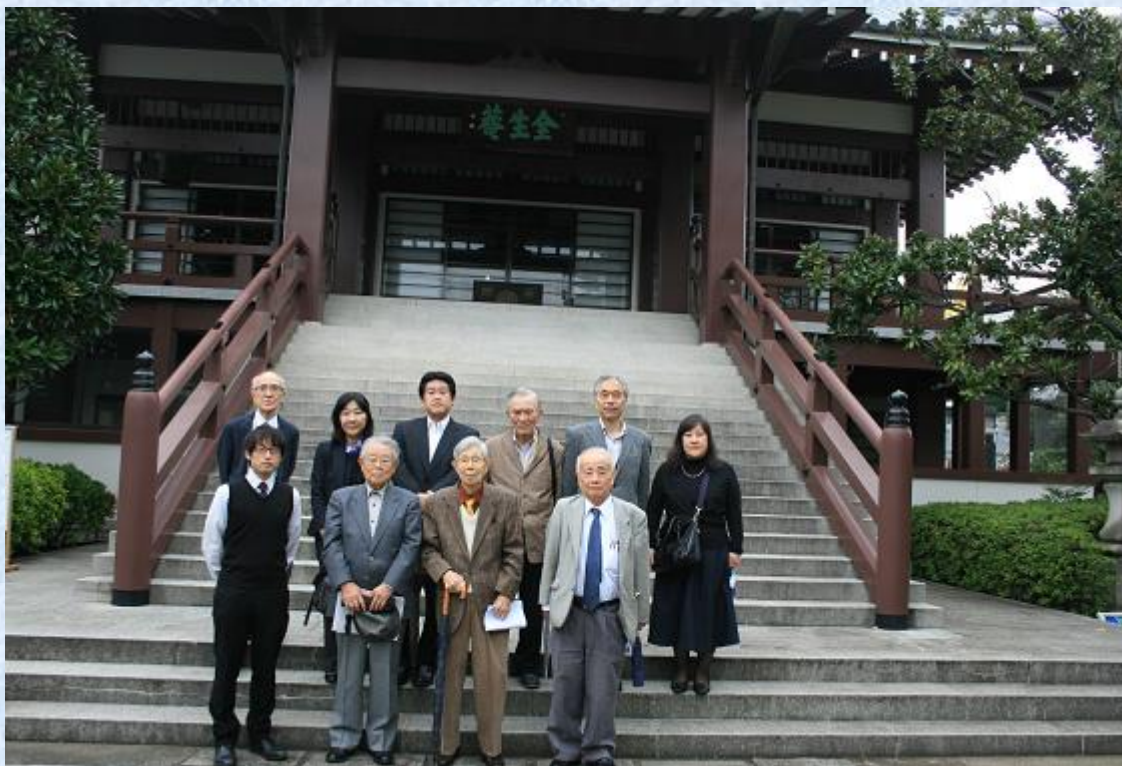


鶴見の総持寺墓前に参り、献花 焼香礼拝のあと、般若心経、院歌 長江の水などを献じ、45年の書院史が走馬灯の如く、参会者の感動を誘いました。

ひと時霧雨模様でしたが、桜は満開、清々しい思いのなかの記念撮影。

御齋は、美味しいビールと紹興酒で献杯。美味しい料理に杯もすすみ、歓談の話題は尽きず、溢れる情報に、多くの感化、多くを学んだことでした。

参加者は、藤田名誉教授、小崎・熊谷(42期)、関谷(44期)、村上(準19期)、齋藤・倉持(霞山会)、平井(大倉精神文化研究所)、小川悟、高井、中島の11名でした。



荒尾東方齋先生墓参  
平成28年10月29日(土) 東京谷中の全生庵

全生庵・荒尾先覚の墓前に、10名が参集、献花 焼香 拝礼のあと、熊谷さんの音頭で、院歌、長江の水、小川悟さん音頭は、愛知大学逍遥歌の献歌、それぞれ墓苑に響き渡りました。

荒尾先覚の時代背景に、上海・書院時代の往時を偲びました。

本堂前の階段で、恒例の記念写真を撮り、献杯は42期 熊谷さんの発声、美味しいお鮎にビールを添えて、しばしの歓談いたしました。

参加者は、熊谷範一郎、藤田佳久、齋藤真苗、倉持由美子、平井誠二、星原大輔、森健一、小川千尋、小川悟、中島寛司の10名でした。





## ② 名誉博士 平松礼二画伯特別展示会を開催

愛知大学創立70周年を記念し、卒業生で本学名誉博士である平松礼二画伯の特別展示会を2017年10月12日(木)～11月14日(火)の1か月間、大学記念館2階西側7部屋にて開催しました。

平松画伯自ら、築109年の明治近代遺産である「愛知大学記念館」(旧陸軍第15師団司令部・国の登録有形文化財)での展示レイアウトを手掛けられ、原画作品58点と屏風6点を厳選されました。日本各地、東海地方、中国、フランス・ジャポニスム、『文藝春秋』の表紙画など多彩な大作を展示公開することができました。

来館者数は2,564名と、大学記念館での催しのなかで過去最多の来館者数となり、大盛況の毎日でした。

多くの方から意見、感想が寄せられました。

### 【来館者の感想】

- ・ 催しがあつて本学旧本館を卒業後久しぶりに立ち寄れたことにうれしさを感じます。
- ・ 近代美術館ではない築109年の日本建築での日本画展示に、相性の良さを感じ、感動しました。
- ・ 今日で4回目です。著名な美術館での開催の場合、鑑賞というより人々をみることになるが、ここはゆっくりじっくり鑑賞でき、感動の日々です。
- ・ すばらしいの一言!でした。すてきな時間でした。
- ・ 友人に誘われて来て、感動しました。生きていて良かったと思えました。いつまでもこの中にいたいと思います。
- ・ 初めて原画を直に拝見させていただきました。すばらしい色彩で感動しました。同窓の先輩がこのような活躍されている事に嬉しさを感じます。私も写真を撮りますが、先生を目標に頑張ります。



愛知大学同窓会 土井会長    愛知大学 川井学長    平松礼二画伯    平松礼二画伯奥様



### ③愛知大学同窓会創立65周年記念『愛大芸術フェア』開催

同窓会65周年記念事業として、また愛知大学70周年記念事業として、全国総会の前後2週間（10月31日～11月14日）、愛知大学記念館2階東側5部屋にて「愛大芸術フェア」が開催され、本学OB・OG7名の写真、絵画、似顔絵作品が展示公開されました。

記念館2階西側7部屋には、本学卒業生で名誉博士平松礼二画伯による日本画作品150点が併設展示され、来館者は2週間で1,744名と、大好評裡で終了いたしました。

#### 【展示品出品者】

写真：東松照明（昭和29年卒）、鈴木智明（昭和38年卒）、八木祥光（昭和38年卒） 山本宏務（昭和39年卒）、新村猛（昭和40年卒）

似顔絵作品：大岡立（昭和47年卒）



鈴木 智明 (S38卒)



八木 祥光 (S38卒)



山本 宏務 (S39卒)



新村 猛 (S40卒)

一特別出展一



東松 照明 (S29卒)

昭和5年～平成24年  
経済学部経済学科を卒業。  
戦後日本有数の社会実力メランマン  
として、海外での評価も高い。

## 愛大芸術フェア 絵画・写真展

平松礼二画伯の特別展と併設し、愛大OB、OGの作品展  
会場・愛知大学豊橋キャンパス内  
愛知大学記念館

2017年10月31日(火)～11月14日(火)  
10:00～16:00

11月4日(土)、5日(日)は式典の為、駐車場はご利用できません。  
公共交通機関をご利用ください。



山口 恵里子 (S46卒)



大岡 立 (S47卒)



愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院（のちに大学）が中心となりました。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学史の研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

現在は、文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、2012年から5年にわたり、5つの研究グループのもと研究を進めています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には本学の歴史などを紹介する展示室があり、見学者への案内・解説もしています。来館者数は年間5000名を超え、本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、広く来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈くださる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただだけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡くださいますよう、お願いいたします。

大学記念館／東亜同文書院大学記念センター  
連絡先 05321474139  
開館時間 10時～16時  
休館日 月・日・祝日・大学が定める休日

### 国際シンポジウム

- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」  
「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」  
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

### 展示会・講演会

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 2017年 岡崎  | 2010年 米沢  |
| 2016年 名古屋 | 2010年 京都  |
| 2015年 松本  | 2009年 神戸  |
| 2014年 広島  | 2009年 シカゴ |
| 2014年 岐阜  | 2008年 福岡  |
| 2013年 長崎  | 2008年 弘前  |
| 2012年 沖縄  | 2007年 東京  |
| 2011年 富山  | 2006年 横浜  |
| 2010年 名古屋 |           |

### 出版物

- ・同文書院記念報 (vol.26まで刊行)
- ・ブックレット (第9巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など

### スタッフ紹介



【左から】長本豊橋研究支援課員、酒井センター職員、藤田名誉教授、武井センター研究員、伊藤センター職員、田辺豊橋研究支援課長



愛知大学東亜同文書院大学記念センター

